

平成30年 5月13日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03254

研究課題名(和文) エゴ・ドキュメントの比較史研究 ヨーロッパの事例から考える

研究課題名(英文) Egodocument in Comparative Perspective: The European Exmaples

研究代表者

長谷川 貴彦 (HASEGAWA, TAKAHIKO)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：70291226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、各自が担当する国・地域(イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・ロシア・スペイン)におけるエゴ・ドキュメント研究の状況を把握した。具体的には、資料編纂状況であり、また分析の方法論である。エゴ・ドキュメントから派生する歴史理論の開拓も進んでおり、例えば、エゴ・ドキュメントを読み解く方法として、史料に照射される「主観性」、さらに情動・感情の歴史が注目されている。本研究の総括的位置を占める日本西洋史学会大会のシンポジウムでは、中世・近世から現代にいたるヨーロッパ内外で執筆されたエゴ・ドキュメントの分析の実践例を提示して、その歴史研究における射程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to make a survey of recent historiographies of ego-document mainly focusing on those in European countries. The project focused on the archival collections of ego-document in each country as well as on the methodological development to explore them. For instance, life-story approach opened the window for looking into the individual subjectivity including emotion or memory, once neglected aspects in historical studies. At the symposium of annual meeting for the Japan Western Historical Society in 2018, our project members explored the future possibilities of ego-document studies in their papers by taking the examples of ego-document from European historical experiences.

研究分野：イギリス史、歴史理論

キーワード：言語論的転回 物語 資料論

1. 研究開始当初の背景

エゴ・ドキュメント研究の歴史は長い。19世紀の実証史学は、エゴ・ドキュメントを重宝して用いてきた。実証主義史学の原則では、史料の執筆者がその出来事に近い位置にあればあるほど、その記述は信頼に値するとされたからである。その後エゴ・ドキュメントを用いた研究は一時衰退するが、1970年代になると再評価の機運が現れる。それはアナル派を中心とする心性史への関心からであり、ひろくローレンス・ストーンのいうところの「物語の復権」と結びつけられている。そして何よりも、1980年代以降のマイクロストリアの潮流が決定的であった。

現在のエゴ・ドキュメントへの関心は、ポスト・モダンないしはポスト構造主義の歴史学の「転回」とも密接に関連している。デリダやフーコーのポスト構造主義は言語や象徴などのもつ規定性・拘束性を強調してきたが、近年は「主体の復権」ともいえる現象が発生している。このような理論的関心が、エゴ・ドキュメント論を歴史学の中心的主題へと浮かび上がらせている。

もともと「エゴ・ドキュメント」(ego-document)という言葉の起源は、1958年にオランダの歴史家ジャック・プレセール(Jacques Presser, 1899-1970)が最初に用いたことにあると言われているが、現在オランダでプレセール以来の研究を継承して発展させているのが、ロッテルダム・エラスムス大学にある「エゴ・ドキュメントと歴史」研究センターのルドルフ・デッカーやマリアンネ・バガーマンらの歴史家である。デッカーらは、オランダの古文書館、博物館、図書館に残されていた、1500年から1918年にいたる自叙伝、回想録、日記、旅行記などのジャンルの手稿史料ならびに印刷資料に関する目録を作成した。この史料編纂事業とは別に、「時間の統制、自己の成形」という研究

プロジェクトを組織、またエゴ・ドキュメントをめぐる国際的な研究集会の開催や共同研究を推進するなど、いまやヨーロッパのエゴ・ドキュメント研究の中心に位置している。それらの成果は、ブリル出版社から叢書として刊行されており、エゴ・ドキュメントの体系的な研究成果として参照されている。

ヨーロッパ全体に目をやれば、2008年に近世史研究者がボルドーにつどって、ヨーロッパ科学基金によるエゴ・ドキュメントの研究プロジェクト「個人の視点から見たヨーロッパの過去：新たなる歴史学のための史料」が組織されている。そこには、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、チェコ、デンマーク、イギリス、リトアニア、ポーランド、ロシアなどから研究者が参加するものとなっている。このプロジェクトを中心に定期的に研究集会が開催されているようで、フランスにおける指導的人物であるフランソワ・ジョセフ・ルッジロは、アジアやアフリカとの比較研究にも乗り出している(François-Joseph Ruggiu, ed., *The Uses of First Person Writings: Africa, America, Asia, Europe*, Peter Lang, 2013)。さらに2012年には『ヨーロッパ生活史研究』(*European Journal of Life Writing*)が創刊され、エゴ・ドキュメントないしはパーソナル・ナラティブをめぐる充実した議論のフォーラムを提供するようになっていく。

日本でのエゴ・ドキュメント研究は、いくつか萌芽的なかたちではあるが、欧米の研究と共振する動向が登場しつつある。たとえば、日本西洋史学会では、2012年には「パーソナル・ナラティブの歴史学」(長谷川貴彦、長谷川まゆ帆、小野寺拓也が参加)2013年には「市民の自分史」(松井康浩が参加)なるシンポジウムが組まれた。また、2014年の歴史学研究会大会全体会が、手紙や証書などの史料研究を取り上げている。そこでは、

分担者である西欧中世史の大黒俊二が報告をおこなっている。代表者の長谷川貴彦は、欧米の歴史学におけるエゴ・ドキュメント研究の動向を紹介してきたが、『歴史評論』第777号(2015年1月)では、「個人史」の特集が組まれ、そこに「エゴ・ドキュメント論」を執筆している。さらに榎原茂編『個人の語りがひらく歴史』(ミネルヴァ書房、2014年9月)が刊行された。これは先の「市民の自分史」シンポジウムの成果をまとめたものであり、日本における研究の到達点を示すものであるが、そこでは、分析の中心が近現代史にあり、中世や近世のエゴ・ドキュメント研究などについては触れられていない。

2. 研究の目的

エゴ・ドキュメントとは、「一人称」で書かれた資料、具体的には、日記、書簡、自叙伝、回想録、証書などを示す歴史用語であり、あえて翻訳をするとすれば、「自己文書」や「私文書」などが試訳としてあてられている。本研究は、このエゴ・ドキュメントを中心とした歴史研究の動向を、広く欧米の歴史学に内在しつつ検討することを課題とする。第一に、ヨーロッパ規模で展開している研究を把握するため、エゴ・ドキュメントに関する研究所(英・蘭)との交流活動を推進すると同時に、研究分担者の対象とする国・地域における研究方法・史料保存の状況を概観しようとした。第二に、研究分担者の現地調査をともなう具体的な史料分析によって、エゴ・ドキュメント研究の実践をおこない、第三に、こうして得られた知見を日本およびヨーロッパの学会ならびに一般読者層に還元していくことにしていた。

エゴ・ドキュメントを利用した従来の研究は、日記・手紙・自叙伝・メモ・裁判記録など多様な史料を駆使し、新たな歴史叙述の可能性を切り開いてきた。しかしそうした先駆的な研究は、興味深い史料を独力で見つけて

きて自らの責任においてそれを読み解くという、ともすれば個人的な営みに陥りがちであった。そのため、そもそもエゴ・ドキュメントにはどのような種類がありうるのか、世界においてそれはどのような形で現存しているのか、史料はどのような経緯を経て「つくられた」のか、その保存・公開はなぜ可能になっているのかという「全体像」が、未だに見えていない。一定の研究蓄積が見られる現在、そうした研究基盤の整備をおこなうことが、今後のエゴ・ドキュメント研究のさらなる広がりのためには不可欠であるし、財政的な理由からエゴ・ドキュメントの体系的所蔵が遅々として進まない日本における現状に対しても、ヨーロッパにおけるエゴ・ドキュメントの全体像を提示することは重要な示唆を与えるように思われる。本研究では、研究方法や資料編纂状況について、研究代表者ならびに分担者が担当する国・地域における研究の状況を把握する。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者ならびに分担者が担当する国・地域における研究の状況を把握し、また中世・近世から現代にいたるヨーロッパ内外で執筆されたエゴ・ドキュメントの分析の実践例を提示して、その歴史研究における射程を明らかにした。

第一に、資料編纂状況である。オランダでは、いち早くエゴ・ドキュメントの編纂事業が進められたが、ヨーロッパ諸国ではこれに刺激を受けて編纂事業が続き、ドイツ語圏でもエゴ・ドキュメント編纂事業が進んでいると言われている。その他の国々、イギリス・フランス・イタリア・ロシア・スペイン(メキシコ)などでの史料保存状況に着目する。どのような史料が現在エゴ・ドキュメントとして扱われているのか、エゴ・ドキュメントはどこにどのような形で保存されているのか、それを可能にする組織的・財政的・文化的理

由は何なのかを、文献調査や文書館における聞き取り調査も交えながら明らかにした。

第二に、分析の方法論の検討をおこなう。エゴ・ドキュメントが注目を浴びるにしたがって、そこから派生する歴史理論の開拓も進んでいる。例えば、エゴ・ドキュメントを読み解く方法として、史料に照射される「主観性」をめぐる理論、さらに情動・感情の歴史が注目されている。

4. 研究成果

3年間の研究活動の成果のひとつは、公開シンポジウムを開催したことであり、具体的には第67回日本西洋史学会大会で発表をおこなった。その内容は、エゴ・ドキュメントをめぐる研究方法や資料保存状況を概観した後、具体的な史料の検討によって分析の手法を示すという二つの柱からなる構成を考えた。事実、シンポジウムでは、エゴ・ドキュメントの研究史的背景を考慮しつつ、中世・近世から現代にいたるヨーロッパ内外で執筆されたエゴ・ドキュメントの分析の実践例を提示しつつ、その歴史研究における射程を明らかにした（報告1大黒俊二「エゴ・ドキュメントの出現 ラテン語から俗語へ」報告2安村直己「エゴ・ドキュメントをめぐるせめぎあい—ラテンアメリカ史研究の現場から—」報告3小野寺拓也「感情と情報リテラシーの狭間で 第二次大戦末期のドイツにおける噂とコミュニケーション—」）。3つの個別報告に対して、エゴ・ドキュメント研究を貫く「書くこと」と「読むこと」に関わる問題について、近世フランス史と現代ソヴィエト史の立場から具体的な素材を提示しながら、広くエゴ・ドキュメント研究に関わる論点を開示した。

もうひとつは、研究成果を論文集としてまとめることである。その内容は、公開シンポジウムの内容を受けて、エゴ・ドキュメントをめぐる研究方法や資料保存状況の国際比較、

そして具体的な史料分析からなる二部構成を考えている。現在、刊行に向けて出版社との交渉、また内容の精査などがおこなわれている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 9 件)

長谷川貴彦、「エゴ・ドキュメントと歴史学 オーラル・ヒストリーとの対話」、『コスモポリス』12号、59-67頁、2018年、査読有。

長谷川貴彦、「物語論的転回 2.0—歴史学におけるスケールの問題」、『思想』1127号、52-66頁、2018年、査読無。

松井康浩、「実証主義とテキスト主義を超えて—歴史研究者は保苅実から何を得たか」、『日本オーラル・ヒストリー研究』第13号、27-34頁、2017年、査読無。

大黒俊二、「都市空間の中の商人集団と異文化交流—中世ヨーロッパを例に—」、『都市史研究』4号、100-107頁、2017年、査読無。

大黒俊二、「声のゆくえ—15世紀イタリアの筆録説教から—」、『思想』1111号、65-79頁、2016年、査読有。

大黒俊二、「野戦郵便とリテラシー 第一次大戦期イタリアを例に」、『歴史科学』226号、28-32頁、2016年、査読有。

小野寺拓也、「感情と情報リテラシーの狭間で—第二次大戦末期のドイツにおける噂とコミュニケーション—」、『歴史科学』226号、15-27頁、2016年、査読有。

大黒俊二、「女性が書くとき—限界リテラシーからみるイタリア・ルネサンス—2015」、『歴史と地理 世界史の研究』684号、1-15頁、2015年、査読無。

Mayuho Hasegawa, “Challenges of ‘Social History’ in Japan: New Perspectives in History2015”, *Odysseus*, 15号、49-65頁、2015、査読有。

〔学会発表〕(計 17 件)

小野寺拓也、「感情と情報リテラシーの狭間で 噂・ニュース・エゴドキュメント」第 67 回日本西洋史学会 小シンポジウム「エゴ・ドキュメントの比較史 ヨーロッパの事例から」, 2017 年。

小野寺拓也、「ナチ体制と「感情政治」」第二次大戦下のクリスマス为例に」, ドイツ現代史学会第 40 回大会、2017 年。

大黒俊二、「俗語とリテラシーからみたエゴ・ドキュメント—中世末期イタリアの女性筆者を手がかりに—」第 67 回日本西洋史学会 小シンポジウム「エゴ・ドキュメントの比較史 ヨーロッパの事例から」, 2017 年。

長谷川まゆ帆、「コメント 1—近世フランス史から—」第 67 回日本西洋史学会 小シンポジウム「エゴ・ドキュメントの比較史—ヨーロッパの事例から—」, 2017 年。

安村直己、「スペインによるアメリカ植民地の形成とエゴ・ドキュメントの拡大」第 67 回日本西洋史学会 小シンポジウム「エゴ・ドキュメントの比較史—ヨーロッパの事例から—」, 2017 年。

長谷川貴彦、「物語論的転回 2.0—『メタヒストリー』と現代歴史学—」国際シンポジウム「『メタヒストリー』の射程で考える歴史叙述と記憶の問題系」, 2017 年。

Takahiko Hasegawa, “A Short History of Historiography in Modern Japan: Brief Comments on Stefan Berger’s *The Past as History* (Palgrave, 2015)”, *Review Forum for Writing the Nation Series*, 2016.

松井康浩、「実証主義とテキスト主義を超えて—歴史研究者は保苺実から何を得たか—」日本オーラル・ヒストリー学会第 14 回大会（「保苺記念シンポジウム—いまあらためて『保苺実の世界』を探る—」）, 2016 年。

松井康浩、「ソ連の異論派と西側支援者を結ぶ越境的モラルティ—エゴ・ドキュメントからグローバル・ヒストリーへ—」七隈史学会第 18 回大会（外国史部会シンポジウム「エゴドキュメント研究の可能性」）, 2016 年。

Shunji Oguro, “La medievistica italiana in Giappone del secondo dopoguerra: recepimento, contribuzione, collaborazione, dalla storia economica comparativa alla storia sociale” 「第二次大戦後日本における中世研究：受容・貢献・共同研究—比較経済史から社会史へ—」, *Italia-Giappone, influenze e scambi dalla storia alla letteratura, dal cibo alla moda e all’arte* (日伊文化交流 150 周年記念シンポジウム), 2016.

大黒俊二、「都市空間の中の商人集団と異文化交流—中・近世ヨーロッパ为例に—」, 2016 年度都市史学会大会 Session III 「都市空間の中の商人集団と異文化交流」基調報告、2016 年。

長谷川まゆ帆、「近代産科医の誕生とその時代：18 世紀フランスにおける助産技法の変化と助産婦の制度化」, 特定非営利活動法人お産サポート JAPAN、2016 年。

Mayuho Hasegawa, “An Anatomist’s Gaze on Bones and Skin in the Early 18th Century: Perceptions of the Mind and Body in Transition”, *Fondazione Bruno Kessler (Trento), Medieval and Early Modern Religious Histories: Perspectives from Europe and Japan, Second Meeting*, 2015.

小野寺拓也、「モラル・感情という視点から見る「包摂」と「排除」」, ドイツ現代史学会第 38 回大会、2015 年。

Naoho Nishimoto and Shunji Oguro, “Pawnbroker as a theft-watcher: Shichiya in early modern Osaka”, *World Economic History Congress*, 2015

長谷川貴彦、「「底辺」からの産業革命」, 立教大学史学会大会、2015 年。

小野寺拓也、「野戦郵便と「リテラシー」をめぐって—その境界と「限界」—」, 大阪歴史科学評議会 5 月例会、2015 年。

〔図書〕(計 13 件)

長谷川まゆ帆、東京大学出版会、『近世フランスの法と身体—教区の女たちが産婆を選ぶ—』, 2018 年、全 496 頁。

大黒俊二、績文堂出版、歴史学研究会編

『第4次現代歴史学の成果と課題3 歴史実践の現在』(第4章1「史料の読みはどう変わったか—「真なるもの=作られたもの」と「起源の偶像」を手がかりに—」を分担執筆) 2017年、全324頁(120-131頁)。

長谷川貴彦、岩波書店、『イギリス現代史』、2017年、全224頁。

長谷川貴彦、績文堂出版、歴史学研究会編『第4次現代歴史学の成果と課題3 歴史実践の現在』(第4章6「エゴドキュメントという方法」を分担執筆) 2017年、全324頁(184-193頁)。

安村直己、績文堂出版、歴史学研究会編『第4次現代歴史学の成果と課題1 新自由主義時代の歴史学2001年~2015年』(第2章2「ジェンダーII 植民地主義との交錯という視点から」を分担執筆) 2017年、全316頁(128-158頁)。

安村直己、三元社、平田雅博・原聖編『帝国・国民・言語 辺境という視点から』(第1章「スペイン帝国における言語をめぐる政治—ネブリッハの夢と現実」)を分担執筆) 2017年、全304頁(16-49頁)。

長谷川貴彦(単訳)、岩波書店、リン・ハント著『グローバル時代の歴史学』、2016年、全224頁。

長谷川貴彦・兼子歩(共訳)、法政大学出版局、ソニア・ローズ著『ジェンダー史とは何か』、2016年、全262頁。

長谷川貴彦、岩波書店、『現代歴史学への展望 言語論的転回を超えて』、2016年、全256頁。

安村直己、山川出版社、『コルテスとピサロー 遍歴と定住のはざままで生きた征服者』、2016年、全100頁。

小野寺拓也、ミネルヴァ書房、田野大輔・柳原伸洋編『教養のドイツ現代史』(第8章2節「前線と銃後、男性と女性」、4節「ホロコースト」)を分担執筆) 2016年、全360頁(181-186頁、190-195頁)。

小野寺拓也・姫岡とし子・石井香江・水戸部良枝・若林美佐知(共訳)、岩波書店、レギーナ・ミュールホイザー著『戦場の性—独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』、2015年、全360頁。

長谷川まゆ帆、勉誠出版、水井万里子・杉浦美樹・伏見岳志・松井洋子編『世界史のなかの女性たち』(第4章「妊娠・出産・育児」「出産の社会史—床屋外科医と「モノ」との親和性」)を分担執筆) 2015年、全264頁(132-152頁)。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

長谷川 貴彦 (HASEGAWA, Takahiko)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号: 70291226

(2)研究分担者

小野寺 拓也 (ONODERA, Takuya)
昭和女子大学・人間文化学部・講師
研究者番号: 20708193

安村 直己 (YASUMURA, Naoki)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 30239777

大黒 俊二 (OGURO, Shunji)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 50152096

長谷川 まゆ帆 (HASEGAWA, Mayuho)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 60192697

松井 康浩 (MATSUI, Yasuhiro)
九州大学・比較社会文化研究院・教授
研究者番号: 70219377